

自尊感情を高める社会科歴史授業開発 —人物学習を視点として—

B3E12041 渡部琴絵

はじめに

本論の目的は、意思決定力を育成し、自尊感情を高めることを目指した小学校第 6 学年社会科歴史授業を開発することである。

学習指導要領では、小学校における歴史学習は子どもたちに何を学ばせ、そしてどのような力をつけるべきものとされているのか。『平成 20 年版小学校学習指導要領解説社会編』の第 6 学年の目標（1）には、次のように示されている¹。

（1）国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする。

目標からもわかるように、小学校における歴史学習においては、歴史的な事象にかかわりのある人物や優れた文化遺産を中心にして調べ、それによって国を愛する心情、伝統や文化を大切に思う気持ちを育てるべきだとされているのである。さらに、我が国の国家・社会の発展に大きく貢献した人物として、42 人の人物が例示されており、人物学習を強調していると捉えることができる。人物学習については寺尾が次のように述べている²。

人物学習は、一般には、歴史上の人物の業績や生き方を教材として人物の行為や出来事、時代の特色について理解させる歴史学習である。

つまり、人物学習は、人物にかかわりのある事象とその時代の特徴を理解させることを学習内容としているのである。人物の周りで起きた出来事や人物が行ったことを知ることで、その時代に求められていた人物像や、社会像、文化にまで目を向け、その時代の特徴をつかませる学習が展開されることが期待されているのである。また、人物を取り上げることで、歴史学習について子どもたちの興味・関心を高めることが期待されているのであろう。その人物が子どもたちにとって聞いたことのある人物であったり、地域に関わりのある人物であったりというように身近な人物であれば、より興味・関心が高まるのではないかと。

また、人物学習では、時代の特徴を捉えるということに加えて、その人物の生き方に学ぶ

¹文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 総則編』、東洋館出版社、p.70。

²寺尾健夫 2004 「認知構成主義に基づく歴史人物学習の原理—アマーストッププロジェクト単元『リンカーンと奴隷解放』を手がかりとして—」、全国社会科教育学会『社会科研究』第 61 号、p.1。

ということも大切なことである。小山田穰等は次のように述べている³。

社会科は人間の生き方に学ぶ学習であると言っても過言ではない。なかでも、今日までの人間がつくり上げてきた社会や文化などについて学習する歴史学習は、人間の生き方の学習とも言える。(…中略…)
「人間の生き方」に学ぶということは、過去及び現在の人間の生き方を学ぶとともに、これからの自分の生き方や在り方について考え、ひいては、自ら自己変革を遂げていこうとするところまで期待している。

すなわち、人物学習は人物を教材にし、人物の生き方から学ぶということであり、それを自分の生き方に生かすということまで求められているというのである。筆者もその意見に同意する。人物の生き方から学び、自分の生き方に生かしていけるということは、子どもたちにとって歴史を学ぶ意義にもつながると考えるからである。

しかし、現実の小学校歴史学習は多くの場合、通史的なものにとどまり、歴史的な事象を網羅的に取り上げるだけで終わってしまっているように思われる。それではただ歴史的な事象を暗記するだけにとどまってしまう。また、人物のよさや業績について学習するだけでは、教科書編集者や教師の価値の注入に終わってしまう恐れがある。このような問題が生じるのは、子どもたちに人物を通して時代の特徴を捉えさせ、生き方を学ばせるということが理念のレベルでは語られていても、実際にはその視点で授業が構成されていないからではないだろうか。

そこで、本論では子どもたちが社会的な事象や時代の特徴を捉え、人物の生き方から学び、それを生かすことができ、なおかつ人格形成を行おうとする人物学習の単元開発を目指す。そのために、先行研究として峰明秀、吉田正生の授業を分析した。その結果、峰と吉田の人物学習は意思決定力育成の社会科論に立つものであり、人物を通して社会的な事象や時代の特徴を捉えるものになっていることが明らかになった。しかし、学習対象とした人物が生きた時代の価値や価値観を明確にするという点では不十分であった。また、人物の生き方を自己の生き方に生かすという視点が弱いことも明らかとなった。さらには、人格のどの部分の育成に重点を置くのかという点も曖昧であった。

こうした問題点を乗り越えるために、次のような授業プランを構想した。まず、学習対象とした人物が生きた時代・社会に通用していた「規範」を学ぶことを通して、当時の支配的な価値や価値観を明確にし、その規範によって構成されている社会構造について理解を図る。さらに、人物の生き方から学んだことを生かして、これから自分はどのように行動していくのかということを考えさせる段階を組み込む。そのためには、児童一人ひとりの内面や価値観のうちのどの部分に目を向け、その上でどんな力を育成するのかを明確にする必要がある。ここでは、とくに児童の「自尊感情」の育成に重点を置きたい。

³小山田穰・渡部八重子・小林賢司・小松沢昌人 1994 『人間を考える新しい社会科の授業 ④「人間の生き方」に学ぶ』東洋館出版、p.5。

近藤卓⁴によると、自尊感情には、社会的自尊感情と基本的自尊感情という二つの領域がある。社会的自尊感情とは、他者との比較によって、褒められたり、認められたりして育まれる感情である。基本的自尊感情は、他者との比較ではなく、無条件に自分を受け入れることができる感情のことである。この二つのバランスが大切であって、基本的自尊感情がきちんと形成されている必要があるという。

では、なぜ、自尊感情の育成が必要なのだろうか。平成 20 年版学習指導要領の改訂の基本方針の一つに「生きる力」の育成が挙げられている。その「生きる力」とは、次のように定義されている⁵。

平成 8 年 7 月の中央教育審議会答申は、変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」とであると提言した。

つまり、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」が求められているのである。この生きる力の基盤となるものこそが、自尊感情であろう。児童一人ひとりが自分を受け入れ、肯定できる自尊感情が育っていることで、「生きる力」の要素である確かな学力、豊かな心、健やかな体を育成することができるはずだからである。さらに、文部科学省「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」⁶においても、意欲を持たない青少年の増加への懸念の背景の一つとして、自己肯定感の低さが指摘されている。つまり、自尊感情は、現代における青少年育成の課題であって、児童に身に付けさせるべきものなのである。

以上、ここまで述べてきたことを踏まえ、どのような授業モデルを作成するか。まず、峰明秀の意思決定力育成の歴史授業モデル⁷を土台部分に置く。峰の授業モデルは社会的事象についての意思決定力を育成しようとするものである。

さらに、これに二つの契機を授業モデルに組み込む。一つは、近藤⁸の「共有体験（体験の共有と感情の共有）」である。近藤は、この共有体験こそが自尊感情の育成に必要なものであるとしている。授業における共有体験とは、授業の中で他者とのかかわりを増やし、主体的に参加し、意見や思いを共有させることである。ここでは、歴史的な人物の生き方に対

⁴近藤卓 2013 『子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット（SOBA-SET）で自尊感情を測る』ほんの森出版、pp.10-16。

⁵文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 総則編』、東洋館出版社、p.3。

⁶文部科学省 「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/07020115.htm 2007年1月30日。

⁷峰明秀 1999 「意思決定力を育成する中学校社会科授業 単元『田中正造のメッセージ』の場合」、全国社会科教育学会『社会科研究』第50号、pp.271-280。

⁸近藤卓 2013 『子どもの自尊感情をどう育てるか そばセット（SOBA-SET）で自尊感情を測る』、ほんの森出版、pp.66-71。

する考えと現代を生きる自分自身の生き方についての考えを他者と共有させる。ただ歴史についての知識を得るだけでなく、自分につながるものとして捉えさせ、自己の生き方について考えさせるきっかけにしたい。二つ目は、築地の「位置づける子」⁹の授業における、子どもの事実の記録であるカルテの書き方や一人ひとりの行動の背景にある人間的な部分を見取るという授業構成法を参考にすることである。さらに、単元の前後にそばセット（SOBA-SET）を用い、客観的に子どもたちの自尊感情のレベルを把握する。

本論では、教材として埼玉県三大偉人で、日本の女医第一号である「荻野吟子」を取り上げる。このとき山崎愛理¹⁰の論文を先行研究として、その教材化を進めたい。山崎は、卒業研究において荻野吟子をジェンダーの視点で教材化する理由を二つ挙げている。一つは、偉人として名を残すというマジョリティーという側面と当時の社会では低い地位しか与えられていなかった女性というマイノリティーという側面の両面を持った人物であり、当時の社会についての学習をわかりやすいものにするからであるとしている。二つ目は、自分の中にも存在するジェンダー観について深く考えさせる教材として適切であるからであるとしている。

筆者もこれらの理由に同意する。児童自身にも「女性は家庭、男は仕事」という価値や価値観が少なからずあると思われる。そこで、現代に生きる児童の内面にある価値や価値観が歴史の中でつくられたものであるということに気付かせたい。これによって、自分と過去のつながり捉えることができ、現代と過去の関連がわかり、児童にとって歴史学習が意義のあるものとなるであろう。荻野吟子の生き方を理解させることによって、子どもたちに自分の生き方をより深く考えさせたい。さらに、荻野吟子の周囲の人々の立場に立って考えることで、時代の特徴や当時の社会に存在した考え方まで捉えさせたい。

以上より、本論では、次の三つの観点を取り入れた授業を開発する。

- (1) 人物学習を用い、意思決定力に加えて自尊感情を育成する。
- (2) そこで、共有体験を取り入れる。このとき「位置づける子」の授業を参考にする。
- (3) 子どもたちに自分の生き方について深く考えさせるため、教材として「荻野吟子」を取り扱う。

以下、本論を次のように構成する。まず、人物学習についての先行研究・授業実践を分析し、その問題点を明らかにする（第一章）。次に、問題点を踏まえ、自尊感情育成について述べる（第二章）。続いて、本論の目指す授業像を明確にする（第三章）。最後に「荻野吟子」についての教材研究を行い、自尊感情を育成する社会科歴史の授業プランを作成する（第四章）。最後に、成果と今後の課題について述べる（おわりに）。

⁹ 落合幸子・築地久子 1995 『教育実践の全体像を描く1 築地学級の授業と学級づくり』、明治図書。

¹⁰ 山崎愛理 2012 「意思決定力を育成する小学校第6学年歴史授業の開発—ジェンダーの視点を取り入れて—」、文教大学教育学部学校教育課程社会専修（提出）卒業論文。